

農耕者と漁労者の比較心理 (5)

A Comparative Psychological Study of Farming and Fishing Villagers

——家族と共同体におけるコミュニケーション

Attitudes toward Communication in Family and Community

服部 純子 HATTORI, Sumiko

● 国際基督教大学教育研究所 研究員

Research Associate, ICU Institute for Educational Research and Service



農村と漁村の人びと, コミュニケーション,
主婦・妻, 子育て, 神霊の宿る家・生業

People in Farming and Fishery, Communication,

A Housewife, Child Rearing, Faithful Family / Occupational Space

ABSTRACT

This study of culture and personality was designed to investigate the comparative psychology of people in farming and fishery and their attitudes toward communication. Research was based on reference to case studies and essays on the way of life and behaviors of families. Results were obtained by research on three particular points of view: (1) housewife and family, (2) living space and spiritual entities, (3) child and family, community. Discussion considered different and common psychological views of communication: the wisdom of the housewife, the faithful family / occupational space, beneficial means of bringing up children.

問題

インターネット、携帯電話等で豊富な情報が交換でき、人と人がこれほど自由にコミュニケーションし合える時代の訪れは、一昔前までは想像できないことであった。グローバル化が進みすぎ境界のない交流が始まったといえる。確かに知的に情報を共有し合えるという利点をもたらしたが、反面、その効率性のよさは、伝統的なものを時代遅れとし捨て去ってきたので、かえって人々はかつてのようなコミュニケーションの場を失ってしまった。それが皮肉にも現在のところ閉塞観を募らせ、かえって負の遺産を多く残すことになってしまったともいえる。

たとえば犯罪の温床にもなっているという出会い系サイトでは、機械という道具を通して、文字化してしゃべり、会わないと孤独に陥り、人からも取り残されてしまうという異常な不安心理が根底に見え隠れする。犯罪者、自殺者、暴力行為に走ってしまうのは、コミュニケーションの手段を失ってしまい、異常なまでのストレス状態に陥り、極限状態で自暴自棄の行動に走ってしまうのであり、その背景には利他性がうせて個の権利を追求してきてしまった社会がよこたわっているからだろう。

情報を介在させながら、人と通じていると思いたい心理、通じ合えるためにどうしたらいいのだろう。伝統的生業で家や家族を存続させていくには、個の主張のみでは生活が成立しないという自明の理があるので、自ずと共同体での家の在り方や手作りともいえる家族のコミュニケーションがあった。今回の研究においては、農業者および漁業者の家族や家あるいは村落共同体で機能している人間関係、コミュニケーションの工夫や知恵をのぞいてみたい。

今回は、その一連の異文化間心理学の本研究として、文化とパーソナリティの観点から、生業文化の背景にあるコミュニケーションの在り方をみていきたい。また、家と女性、家のもつ役割、子と村落共同体とのつながりを考えていきたい。本研究の意義は、現代の失われた家族の心をもどすきっかけになれば幸いである。

目的と方法

今回は、本研究の第五回目の研究（前回まで信仰・アニミズム主体）として、農村および漁村における子育ての在り方、嫁・主婦と家族、神霊と家との兼ね合いをみていくことで、家族にとっての家のもつ象徴的意味を見出し、社会性を育てるコミュニケーションの在り方を、文化とパーソナリティの視点から、比較心理学的にみていくことを目的とする。

(I) 嫁・主婦と家族、(II) 家と神霊、(III) 子と家・共同体についてそれぞれの生業の特徴や差異を示す事例や内容を抽出し結果をまとめ、これら3つの基軸に対する態度について考察していく。

なお、事例の参考文献として、以下のものを参照とした：柳田 (1962, 1963, 1964)、坪井 (1971)、牧田 (1942)、飯島 (2001)、高橋 (1998)。

結果

農村

A. 嫁・主婦と家族

1. 嫁と姑

嫁入りの華やかな入家式に際し、親族は正面入り口から入り嫁だけが勝手口から入るところが多く、また姑から渡された盃で出入口・台所で祝盃をあげた。姑がまだ主婦の座にいる間は、嫁は下座に坐って、家事や家風などのしきたりを教わった。嫁は日々姑に気兼ねし、夜なべ作業で乳児が泣かないように種々工夫した。

2. 嫁と主婦権

嫁は、姑との同居で厳しさやいじめ等の辛さに耐え抜いて、姑からシャモジ権を譲渡してもらいはじめて主婦権を授かった。家族の食事の配分量は主婦の裁量に任され、家長には多く分配し、家族の不在者に対しては陰膳を供え、旅先で食に困らないように祈った。

3. 嫁・姑と炉

炉の管理は姑から嫁にまかされていた。家長を上座に家族の序列で炉の座が名付けられ、その

周りで食事をとる家族の団欒の場があった。ハレの日の食事や講、寄合などの接客の場も兼ねていた。まだ姑が主婦の座に坐って火を守って夜なべの場合、家長が縄をにない嫁は針仕事をしたりした。

B. 家と神霊

1. 家と祭祀

一般的農家は、土間に台所・出居・納戸・座敷の田の字形態であり、神棚や仏壇が表座敷に設けられ、納戸神やその他の神々である火神、竈神、農耕神、水神等が裏座敷に祀られた。

2. 食事と神仏

家族が食するときには、同時に神仏へもお供えした。「年中麦飯を食い、仏前にそなえる飯と盆、正月、祭日だけは白飯であった。丁寧な家では小さい御膳様用鍋で炊いたが、普通の家では自分らが食べる飯といっしょに炊き、下のほうの白飯をもった（福井県吉田郡永平寺町字膳）」

3. 土間と産神

出産には納戸も一般的に使用されたが、土間では藁等を敷きつめ、藁束とか俵によりかかって産み別火生活が行われ、雪隠神・便所神、山の神が出産の手助けにくるとされ、箒神は一般的であるが、農村の特徴として廁神を重視していた。

4. 出産と廁神

廁神は主な産神とみなされ、出産前後に廁の掃除がいき届いていると、安産になるきれいな子が生まれるとされた。逆に汚したままであると、痘痕や不具の子が生まれ禍があるといわれ、妊婦が雪隠掃除を日課としたところもあった。

5. 出産と納戸神

「主婦の子を生む場所と、稲の種の管理される小さな一室（納戸）とが、ひろい地域に互って以前から同じであった…狭い隠れた家刀自の寝室に、稲の穂・粃種又は米を以って祀る農村は全国に散在」（柳田，1964, p166）した。

C. 子と家・共同体

1. 一人前と生業

生業を通して子の躰は七歳ころから始まったが、

親の作業を子に模倣させてコツを学ばせた。荷物の運搬をまず教え、草刈りなどや、草鞋作り、縄ない、田起こし後の畦たてをさせ、肥桶を担ぎ、牛馬を扱えるようになると、十六、七歳で一人前と認められた。

2. 躰と家庭

嫁は姑から子育てを教わったが、兄弟や祖父母も子守や躰を手伝った。子は乳児期から大勢の会話や行動を見聞きして育った。学校からの帰宅後は、友と遊んだり家内労働も分担し手伝った。掟を破った場合は、土蔵や押入れに閉じ込められ厳しく叱咤され体罰をうけた。

3. 遊びと村社会

喧嘩や暴力やいじめは日常遊びでよくみられ、男女の遊び仲間には年齢幅があるが年長者は年下の面倒をよくみた。子供組は非日常的行事で活躍し、祭礼等で神輿担ぎをしたり物貰いの風習を行ったり、八月十五夜の行事では供え物を盗むことが公認されたりした。

4. 規範と若者組

若者組では挨拶や祭事や日常生活での心構え・行動の仕方を規定し、秩序の逸脱や過失を犯した者には、最重罰則であるハチブの制裁も行った。また、失笑や陰口をいわれないよう気のきいた寸言で笑いを誘う諺を、行動の規範として身につけた。

5. 奉公・作法と仮親

親は子を草鞋親、烏帽子親、躰親、職親、里子に預けたりして、年期奉公や躰奉公に出し、礼儀作法や仕事を身につけさせた。つけ届け等を行いその義理的な擬制的親子関係を大事にした。

漁村

D. 嫁・主婦と家族

1. 嫁入と婚方

結婚が喜びにつながる事例は多く。たとえば婚方が嫁方へ酒、赤飯、鮎などを持参し、嫁入りの日取りなどをきめるのをヨロコビといたり（長崎県五島の久賀島）、婚約成立後、婿の近親の女性たちが嫁方の親類を回って御礼を述べて歩いたり

(山口県萩市大島), 嫁入では稼ぎ先の地域の女性の賑やかな歓迎をうけた。

2. 嫁と竈

魚の行商もして経済性もになう多忙な嫁・妻は、竈重視の間とりで炊事し、日常野菜を主として食す農村(炉も併用・重視)に比べ、魚を食す漁村の食事は多少多彩であったので工夫を必要とした。

3. 嫁と姑

夫婦単位・親別棟で息子の婚姻後、姑舅は母屋を息子夫婦に譲渡し隠居屋の方に移った。夫婦関係が主体で嫁・妻の地位は低くはなかった。嫁と姑の間には、母屋と隠居屋で一定の距離が保たれながらも常に互助関係があった。

E. 家と神霊

1. 家と祭祀

奥の間は夫婦の寝所・納戸にあたり、夫婦の営み、出産(他例は別棟産屋)、病気や疲労時に休養、死亡の際に湯灌などの儀礼、という四つの空間の機能をもっていた。非日常空間の機能をもつ座敷部分は、神祭祀と客を招く公的空間であった。

2. 出産と箒神

箒神への信仰は篤く、産婦の腹を撫でたり枕もとか足もとに逆さに立てて置くという習俗があった。また、たとえば、ウブガミ様が戸の棧に腰を掛けるからそこを箒で掃く(筑前大島)、お産が目前になると箒を立てて酒を供えたりした(長門相島や大島)。

3. 出産と産婆・産穢

出産祝には産婆・巫女的存在をもてなし、餅や米飯を村の女性で男性不参加で共食してもらった。また、産穢が家に悪い影響を及ぼさないよう、産屋で忌明けまで産婦と生児を隔離した。

F. 子と家・共同体

1. 一人前と生業

生業を学ぶには、親や親方・網元等の技術を模倣し見習い、習得していく必要があった。厳しい躰のもと、何度も修練を重ねて技術を身体で覚え、ようやく一人前と認められた。農民より漁民の方が、共同での過酷な作業が多かった。

2. 遊びと子供組

子は子供組に七歳頃から加入し十五歳前後で脱退するが、その間集団で氏神に参詣したり、祭事や行事その他の活動も活発であった。次の年齢層集団である若者組や娘組に加入していったが、子供組は、若者組から様々な形で援助を受けまた逆に若者組の活動を支えた。

3. 女子と盆釜

女子の盆釜行事は磯辺で共同飲食を行い、漁村ではよくみられた。外精露がいじょうろや無縁仏がうろつので、供養をして悦ばせて返す必要があり、家での竈の使用を避け、海辺に竈をすえて餓鬼飯を作った。

4. 階梯制と若者組

男子の年齢階梯制の若者組では、各年代における役割分担での活動が顕著であった。たとえば(志摩の今浦)、下働きから始めて青年団成員になり、厄落後三十歳までは特別団員で、結婚し消防団員に、そして地縁組の雑用係となり、その後は組長等として村の政治を担い、また元老、監査役になっていった。

5. 子育てと仮親

生児と産婆の擬制的親子関係の絆は深く、乳親、名付親、拾い親、子守り親等幼年期に結ばれ、成人時には名付親が元服親やへこ祝親になった。盆暮れや正月や節供につけ届けをし生涯交際する機会が多かった。女性は、鉄漿付け以後、鉄漿親との犠制的親子関係が生涯続いた。

考察

農村

I. 嫁・主婦の家族に対する態度

日々の家族のコミュニケーションには、家長中心で嫁姑関係(A-1, A-2)における嫁の多大な忍従・我慢、特にシャモジ権譲渡前には嫁の姑への大変な気遣いがみられるが、両者には抑圧する側とされる側でありながらも、家を守るという女性の同土関係もみられる。嫁はシャモジ譲渡後は、主婦の座(A-3)の火・炉を守る権利を得、家を存

続することに使命感をもつようになる。主婦がシャモジ権に象徴 (A-2) されるように、家長をたてる家の原理によって食物を配分し、家族成員の労働・健康管理に考慮してシャモジ加減を工夫した。家族の不在者に対しては陰膳を供え、常に主婦のした支えのもと家族個々への心配りがみられる。

炉をとりまく家長中心の団欒には (A-3)、長幼の順で象徴される家の原理がみられるが、序列志向でありながらも家族のコミュニケーションを同次元で共有させる役割を、象徴的である炉を管理している嫁・主婦が担っているといえる。また、子の行儀作法や躰につながる行動の規範を、親や舅姑等の態度の厳しさから学びとれる機会を与えている。

また、嫁は、農業の労働力の担い手であり、家の永続のために子を産むことが前提とされる促物・滅私的存在であり、自己を抑圧し感情の鬱積を吐露できる場が少ないまま、恨みという負の部分を増幅させてしまい、多々問題視される嫁姑問題をも残存させてきたともいえる。その点、家族関係内の風通しをよくする工夫は、後述するように漁村の方にみられる。

II. 家に宿る神霊に対する態度

家は表座敷と裏座敷の両面の機能を兼備えている。裏座敷側は、納戸神が祀られ (B-1)、柳田 (1970, p166) が指摘する霊的場がみられる。また宮田 (1983)、村武 (1992) によれば、表座敷の神仏を祀る人が家長または男性で、それに対し、裏座敷の私的神々の司祭者は主婦である女性であるという。農民の家空間には自ずと陰陽関係が備わっていたと想定される。また、食事は家族全員、祖先や神さまと共食することにより (B-2)、日常生活に小さな聖なる行事が溶け込んでいることがうかがわれる。家で毎日神様に祈ったりし感謝する感覚が芽生え、自ずと子どもは、倫理観・信仰心を身につけていったと考えられる。

稲の豊穰を願う納戸 (B-5) での受胎および出産は、祖霊の庇護の下におかれたといえる。別火生活も家で行われており (B-3) 出産への忌む感覚が強い。忌期間も漁村に比べ (前研究 (2) 参照)

短いのは、農耕には豊穰の概念が強く、稲種子がスジとしてとらえられることによって再生がくり返され、稲霊のもと家存続の強い意識下に出産が置かれており、再生観がみられる。

また、出産と土間が離れがたく結びついてきた (B-3) ということは、先祖たちが抱き続けてきた土への執着がいかに原初的な信仰に近いものかがうかがわれる。婚礼のときに嫁の入室するところも婚家の台所の出入り口 (A-1) であるのも、土間が女性と深くかかわってきたことを示唆するものであろう。このことは、女性が相対的に土間を中心とした民俗の神に奉仕し、男性が座敷に祀った制度の神に奉仕をしてきた (坪井, 1986) ことを意味するからだろう。

出産前後に行う廁行事 (B-4) を重視するのは、井戸・竈などと同様にこの世と異界を結ぶ空間であり (飯島, 2001, p106)、赤子のこの世への再生する儀礼だった (同上, p131) からで、廁はこの世への移行の媒介をなす空間といえることができる。また、農家にとって廁はたんに排泄物の捨て場ではなく、大地の生産に必要な下肥の溜り場とする考え方は強いものがあつたので、下肥には、植物の生命力を育んでいく力があることにより、雪隠神を信じる (宮田, 1983, p166-167) ようになったといえ、神霊への素朴な信仰心がみられる。

III. 子育てに対する態度

子に生業 (C-1) を多面的に経験させ、田植えや^{はしゆ}播種を作物のシツケといい、人並みの人や物としての型を身につけることを意味した (竹内, 1961, p4) ことから想定されるように、人並みにあわせて調和する術を、一人前になるために躰られたといえる。

子は、幼少期から生業だけでなく家事も手伝った (C-2) ので、幼いときから家族員の多い生活共同体の秩序のなかで、協調し利他性を学びながら苦勞多く育っていったことがうかがわれ、漁村の夫婦・子どもの小世帯家族と比べて、自由は制限され、規範破りへの制裁も厳しかった。が、反面、家の永続のために、家の継承をになう超世代的な存在として、大家族の庇護のもと精神的な安定感

を保ちながら成長できたといえる。

喧嘩・暴力、盗み、いじめ (C-3) は、幼年期において、日常の遊びや子供組の非日常の行事で昇華していける村の共同体があった。当時は家も村社会も日常的に区別なく連続していたために、子供は、若者組の活動を通して (C-4)、男女共に集団生活の中で世間並みや、複雑な人間関係の術を学んだ。異なる年齢の他者とも連帯感や結束力を深めたり、村ハチブにされないよう笑いをとる知恵を学び、大人社会の規範を自然に覚えていったことがわかる。

盗みや物貰いは、子供が神の代わりとなって供え物を持ち去る意味と解釈されており (坪井, 1971, p218), またいじめが生じて排他的になっても、村落共同体では子供時代にそういうものを昇華させていける基盤があり、多面的に子育てを図っていたといえる。また、子は里子や年期・躰奉公に出され (C-5)、その擬制的親子関係を保つため、上下関係で奉公的に気づかひながら複雑な人間関係を学んでいったといえる。

漁村

I. 嫁・主婦の家族に対する態度

漁村の結婚の慶事 (D-1) では、農村でみられる嫁と姑が入家式で盃をかわす血縁関係重視の儀よりも、共同体を含めた婿方の女性と共に開放的に喜ぶ様子がうかがわれる。新しい出会いに感激し、女性同士の開放性、陽気さ、積極性がみられる。結婚にあたり、農家のように嫁が最初から、労働力、家の永続の為に子孫を作る (象徴的な例として、その入家式の土間・台所での儀式) という前提もあるが、まずは嫁ぎ先の家族や地域社会で個として大切に迎え入れられている。嫁の家族関係は、まず血縁地縁関係の女性との分かち合いのコミュニケーションから始まるともいえる。

日常野菜を主とした食事を摂る農村に比べ、魚を日常食す (D-2) ので、魚をさばいて料理する技術や工夫が必要とされ、家族にバランスよく美味に食させる能力も実質性の問われる漁村の主婦の役割なのだろう。家族成員のコミュニケーション

をうまくとる手段の一つになっているかもしれない。

行商において家の経済を支えることもあいまって妻の立場は低くないことより、親別棟で対夫との直接の関係の家空間では (D-3)、対等関係が成立しやすく、風通しがいい夫婦関係の反面、互いに自己主張的な対立関係も生みやすいだろう。しかしながら、親別棟で互助関係なので、農村におけるような嫁姑関係の対立と悪化がある程度回避され、嫁の地位から主婦への移行はすっきりと行われるのだろう。身内での人間関係が複雑にならないように心がけていることが想定される。

II. 家に宿る神霊に対する態度

納戸は 4 つの機能を果たす (E-1) ように、通過儀礼にかかわる重要な空間であった。ある特定の状況から別の状況に移行する際の中間のプロセスを担う空間であるので創造の可能性をはらむという、坪井 (1986, p131) の指摘に同意する。寝所の空間は、農家の伸縮自在型の間取りとは微妙に異なった感覚がうかがわれ、母屋への外来からの文化要素を排除することが狭い住居を基調とする漁民の家の特色となっており (宮田, 1983, p157- p158), その空間が忌まないようにとの配慮がありとくに清浄性を問題にしており、神聖視する態度には差がみえるように思う。

上述したように、農村でいう納戸は祖霊との兼ね合いの他界的要素がみられるが、いずれにしても両者間で異界のメタファーという共通の意味合いをもっていると考えられる。また、漁村の場合、坪井 (1986, p134) の言及する現世と他界の二つの観念を統合する原理のひそむ世界があるのではないかという示唆に賛同する。

お産に箒神を信仰するのは (E-2)、神霊の依代としてふさわしいと古くから考えられており、箒が人の生死と深い関わりをもった呪物であることは、『古事記』『日本書紀』からも明らかである。箒は塵芥を掃き出したり掃き集めたりする道具であるが、難産などの際に箒で産婦の腹を撫でるとすぐ生まれるという伝承は、胎児を塵芥とみなしてこの世に掃き出す行為を象徴的に表わしており、『日

本『靈異記』でも箒は再生の呪具とされ、神霊を招き払うという二機能をもち、霊魂の誕生の媒介役をしていることが想定される。

当時出産直後に亡くなる者が多く、異界からこの世に誕生した赤ん坊を確実にこの世の存在として、死ぬ危機を避け健やかに生存できるように、誕生前後の行事 (E-1, 2, 3) を大事にしたことが考えられる。そこには、家がもつ霊力を信じ、産婆や地域の女性の霊性にたのみ、地域とのコミュニケーションを図りながら魂の定着化の儀式が行われたといえる。

III. 子育てに対する態度

一人前になる (F-1) には、技術力が必要とされる漁労の習得にある。厳しい親分・網元の強いリーダーシップのもと、運命共同体的な作業の中で、上下関係や同士の関係に依存するコミュニケーションの中で利他性を学び、勘やこつがものをいう独自の技術力も問われるので、個々や独立性を図らざるを得なかっただろう。

子は子供組 (F-2) という集団生活の場を通して、村での社会的役割を果たしてきたといえる。これは一人前の成員となるための訓練の場として農村同様に制度化されているが、漁村の方がその活動にさらに熱心なのは、年上年齢層である若者組が子供組の活動への援助をし、団結力のある子供組が若者組のした支えになっているからだろう。

女子の盆釜 (F-3) の行事で、海辺等に竈を持ち込んだが、柳田 (1962, p39-40) によれば、子供は触穢の忌に対して成人程忌まないと考えられ、特に接待係りとしての任をまかされたという。この祭場は、無縁仏や外精霊など異界の存在を迎え祀る場であるこの世と異界の境目にあたる。これは農村での施餓鬼行事にあたり、漁村では女子が施餓鬼をねぎらい供養できる霊的な能力の持ち主であることを前提にしており、その神性をさらに高める機会がもうけられて女子は育てられている。

漁村の若者組は、年齢階梯的に制度的に整っている (F-4) ことがわかるが、その背景には、漁労が村の共同体に依存する生産・労働方式であり、若者組と深く結びついている (高橋, 1998) から

で、若者は実質的な組織の役割分担で社会的なルールやコミュニケーションの手段を学んでいったのであろう。

漁村でも、実の親のもと多様な仮親関係 (F-5) の手も借りて一人前に成長していったが、その関係性を大事な絆として、また一生の繋がりとして継続させている場合が多かった。とくに霊性の備わる産婆との擬制的親子関係には重きをおいており、また子は誕生以来地縁・共同体のコミュニケーションの中で開放的に育てられたことがうかがわれる。

まとめ

農村と漁村いずれにおいても、家族の支えとなって家をきりもりしているのが主婦・嫁の媒介的存在であった。特に農村の場合、制度や社会にかかわり権威主義的に陥る父性原理を、緩和させている女性原理がみられ、いずれにしても家が両親の両性原理の相互作用で機能していた様子がうかがわれる。各特徴としては、漁村では、夫婦の個と個の関係軸を重視した家族のコミュニケーションを大事にし、また女性同士の地域における連帯性をを大切にした。農村では家長中心で嫁と姑の主従の関係軸を基本に、血縁性を大事にするコミュニケーションをはかった。

両生業者ともに、神霊への信仰心篤く、家族の信頼の絆を深めている。農民は、家にかかわる神霊とのコミュニケーションを重んじ、祖霊観が強く家族同士の連帯性を高めた。また、漁民も家の清浄性を保ち魂の定着を重視し、また霊性の交流を外部の人間にもはかり、そのコミュニケーションを大事にした。

いずれの子育てにおいても、実の親自らの厳しい躾や関わりだけでなく、また仮親の存在や共同体の影響を多大に受け、人生儀礼において異なる人々との種々のコミュニケーションを経て成長し、協調性や利他性を学んでいった。とくに農村の場合、人並みに育てる土壌がみられ、また長幼の順や上下関係の奉公的精神を重んじる子育てを行っ

ていった。漁村でも、実親子関係だけでなく、年齢階梯組織を含め仮親や労働の親方との関係によって、人間関係の層を広げて社会的に多面的な人間の営みを学ばせて固化・独立性を養っていった。

以上、両生業文化における比較心理を試みてきた。その両文化の背景の共通項には、日本においてははるかなる過去には、渡来してきた幾族かの海民（遊牧民が基層）文化が考えられるが、本研究においては、表層構造における農耕者および漁業者についての特徴をとらえた比較心理学の試論をおこなってきた。

また、問題の背景でふれたように、現代の IT 革命化のもと虚像のなかで固化が非常にすすんでしまい、今回考察してうきばりにされたかつての家族成員がもっていた信頼感や連帯性、篤い信仰心、また媒介的存在の母性が現在うせてしまっている。しかしながら、今は女性原理を多分にもつ男性や男性原理を強くもつ女性がでてきており、男女の役割が入れ替わってきている例も多々みられるので、将来家の機能の仕方は、過去の在り方も生かした新しい家族のコミュニケーションのなかでの人間関係が生まれてくるのだろう。

参考文献

- 石塚尊俊 (1994) 「納戸神に始まって」「納戸神補稿」『女人司祭』, 慶友社
- 大間知篤三 (1943) 「呪術的親子」, 『神津島の花正月』, 六人社
- 折口信夫 (1976) 折口信夫全集, 第十六巻, 民俗学編 2, 中央文庫
- 小松和彦編 (2001), 飯島吉晴「厠考—象徴的空間としての厠」『境界』, 河出書房新社
- 高橋統一 (1998) 「家隠居と村隠居—隠居制と年齢階段梯制」, 岩田書院
- 竹内利美 (1961) 「教育と医学」第九巻第五号, 教育と医学の会
- 谷川健一編 (1990) 渚の民俗誌, 日本民俗文化資料集成 5, 三一書房

- 坪井洋文 (1971) 「人生の儀礼」『日本を知る事典』社会思想社
- 坪井洋文 (1986) 民俗再考, 日本エディターズスクール出版部
- 牧田茂 (1942) 産神と籌神, 民間伝承, 8 巻 7 号
- 宮田登 (1983) 「女の靈力と家の神—日本の民俗宗教」, 人文書院
- 宮本常一 (1961) 庶民の発見, 未来社
- 柳田国男 (1962) 「こども風土記」『定本柳田国男集』第 21 巻, 筑摩書房,
- 柳田国男 (1963) 「家閑談」『定本柳田国男集』, 第 15 巻, 筑摩書房
- 柳田国男 (1963) 「平凡と非凡」『定本柳田国男集』, 第 24 巻, 筑摩書房
- 柳田国男 (1914) 「倉稻魂考」『定本柳田国男集』第 31 巻, 筑摩書房
- 村武精一 (1992) 家と女性の民俗誌, 新曜社